# 根本かおるさん　日本UNHCR協会事務局長

## 親と子を語る

## 父から学んだ「人をだますな」

### 商社マンの父 小学生のとき家族でドイツへ

父は商社マンで海外出張が多く、ベトナムや韓国に単身赴任していたこともあります。家にはアジアやアフリカ、中近東で買ってきたおみやげがごろごろしていました。

父が突然ドイツに赴任することになり、小学三年から中学一年までドイツで暮らしました。

家族と一緒にドイツに到着したのは十二月。翌日、現地の公立の小学校に連れていかれて入学しました。

### 外国生活の大変さを生活して実感

ドイツ語のABC（アー、ベー、ツェー）も分からないので本当に困りました。でも、クラスの子どもたちより、わたしは暗算が速いことに気がついたんです。クラスメートたちも、わたしがドイツ語が分からないのに算数の問題がすらすら解けるのはなぜだろうと思ったようです。解き方を教えてあげる代わりに、ドイツ語を教えてもらいました。

クリスマスの時期だったので、クリスマスかざりをつくります。日本人は手先が器用なのでていねいにつくるんです。わたしはかざりを代わりにつくってあげたり、手伝ったりもしてドイツ語を教えてもらいました。

ドイツでは悔しい思いもしました。むこうの人は、アジア人の顔を見ても中国人か日本人か分かりません。

東アジアの目の細い人たちをからかう動作があるんです。道や校庭を歩いていると、突然からかわれることがありました。自分が区別されてしまう側にいることはショックでした。外国にいると、たいへんな思いをするんだなと実感しました。

母が買い物で苦労しているのを見て、ことばも補習が必要だとも思いました。

### 難民の若者をはげますのも大切な仕事

大学を卒業してテレビ局に八年間勤めるなど、寄り道をしてから国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に入りました。

国連というのはいろいろな立場の人がわいわいがやがやって、物事を決めていくところです。「あうんの呼吸」なんてありません。ひとつひとつ相手が納得できるまで説明し、引くときは引きます。

父から学んだ「人をだますな」が役に立ちました。物事は信頼で動いていくというのです。人道援助の世界は狭い世界です。ある所で「あいつは悪いやつだ」と評判が立つと、すぐに広まります。

UNHCRは難民の命を守るだけでなく、将来への希望が持てない難民の若者をはげます仕事もしています。

ネパールの難民キャンプで、わたしはブータンからのがれてきた難民の人たちの支援をしていました。

ここの子どもたちは中学校までしか行けません。ネパールは、キャンプの外できちんとした仕事につくことを禁止しています。将来性がないことでくさってしまい、暴力をふるったり、うつになったりする人が多いのです。

わたしはキャンプ内にスポーツ施設をつくり、日本からスポーツ選手を呼びました。スポーツは人の心を明るくするからです。

キャンプ内で暮らす女の子が、「マダム・カオルのようになりたい」といってくれました。わたしがしたことはわずかなことですが、とてもうれしかったです。また、現場にもどるつもりです。

（聞き手　松村　順子）
（写真　渡辺　英明）

ねもと・かおる　1963年、兵庫県生まれ。東大法卒。テレビ朝日にアナウンサーとして入社後、報道局に移る。同局初の政治担当女性記者に。94年に休職、アメリカ・コロンビア大学大学院へ留学、「国際人権・人道問題」をテーマに学ぶ。卒業後、96年からUNHCR勤務。トルコ、ブルンジ、コソボ、ジュネーブ本部、ネパール事務所などを経て、2006年2月、ネパール・ダマク駐在事務所長。07年6月にUNHCRの公式支援窓口、日本UNHCR協会の事務局長に就任。「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2007」（日経ウーマン主催）受賞。既婚。